

## 79 teatime

去年は、論理の厳密さを求められる考察もして肩が凝った。実際に左腕から首までに痛みを感じ、お医者さんが、念のためにと核磁気共鳴の画像まで撮らせて頸椎を診察した。もともと、自己診断ではへたな体操のせいだったと思う。そういうわけで、今回は肩をほぐすためにお茶の時間にしよう。今年、二月四日が立春で続く五日が旧暦の元日というめでたい暦にめぐり会えた。そのとき床に掛けた軸のおかげで、とても楽しい時間を過ごすことができた。それは「雑詠日記」に書きつけているが、今年の巻が無事に完結するとしても年末になるので、ここに先日の楽しみを記しておく。

### 二月四日立春

昨晚、細君が今日のために離れの床に「春入千林所々鶯」という掛け軸をかけた。つられてわたしも、表座敷の床の間に「春水蘆根□鶴立」の軸を掛ける。七つの淡い模様の上に隸書体で書かれた書で、五文字目の□は前から読めなくて困っていた。今日は思い立ってインターネットで調べてみて、画像の集まりの中に同じ文字の句を見つけた。やはり、「翰」の字形で「羽」の部分が「目」と書いてある。だが、検索して出てくるのは中国語で書かれた記事ばかりで、まだ読めな

い。目を移していくと、墨跡を紹介したらしい文に□を「朝」とするものがあつた。□は「朝」の字かもしれない。画像に出てきた書にはこの七言と対になる句「夕陽楓葉見鴉翻」が並べてあつた。じつは、わが家にはこちらの句の掛け軸もあつて、二つの掛け軸は瀋陽でもらつたものである。「鴉翻」が「鴉飛」と書かれているけれども、鴉は鴉(カラス)の異体字ということだから、文意は同じである。立春に、「春水蘆根□鶴立」の方だけを掛けたのは、「夕陽楓葉見鴉飛」が秋の印象を与えるように思つたからである。

探索はおもしろい成果をもたらした。この対句はもともと敬愛する蘇軾の次の詩にあつたのだ。

其二	不用長愁掛月村	檳榔生子竹生孫
	新巢語燕還窺硯	旧雨來人不到門
	春水蘆根看鶴立	夕陽楓葉見鴉翻
	此生念念隨泡影	莫認家山作本元

註：第四句、旧雨は昔なじみ。第八句、家山はふるさと。

同じ四文字（孫門翻元）で押韻する連作の律詩のうちの第二首だから、モチーフと形を決めた第一首も掲げておこう。

其一	老去仍棲隔海村	夢中時見作詩孫
	天涯已慣逢人日	歸路猶欣過鬼門
	三策已應思賈讓	孤忠終未赦虞翻
	典衣剩買河源米	屈指新筭作上元

註： インターネットによると、第五句の賈讓は前漢の人、黄河の河道を変えることを献策、のちに左遷されたが復官。第六句の虞翻は孫権に仕え、蘇軾と同じように南方に流された。赦免しようとしたときにはすでに亡くなっていたので、子らがとりたてられたという。第七・八句は、衣を質入れして南方で有名な米に変え、酒の出来上がる小正月を指折り数えて待っているようすを詠う。

書の軸で元の詩の「看」を“朝”に変えたのは次の句の「夕」と対照させたと見える。それだと、二句は朝と夕べの情景を歌うことになる。ところで、この詩は、「春水蘆根□鶴立」の句をキーワードにして中国語の「維基文庫」で見つかったのだが、「夕陽楓葉見鴉翻」の句による探索はもう一つの詩を挙げた。唐の陶岷という人の詩「西塞山下迴舟作」で、第五・六句に「鴉翻楓葉夕陽動、鷺立蘆花秋水明」とあった。蘇軾の詩は本歌取りをしているのである。考えてみれば、漢詩も和歌と同じく昔の秀句を変奏することをしてきた。宋代第一の詩人とされる蘇軾は教養が深く、自然に古句を詠み込むことが生じる。二つの詩を比較すれば、元は秋の詩だったものを、蘇軾が春の詩に変えたことが知られる。この詩がつくられたのは1100年太陰太陽暦の正月七日と分かっている。場所は海南島。第二句の檳榔が教えるようにそこは亜熱帯にある。蘇軾が見たのは鷺ではなくて鶴の一種で、「楓」も紅葉する種とは違うかもしれない。むしろ、蘇軾はその場の実

景を詠んだのではないか。「看」と「見」は二つの文字に書き分けただけで、夕陽の句と対応させるために前の句に朝をもってくる必要はなかったのだ。そう考えると、第六句は少し寂しいけれども、詩を、旧暦の正月蘇軾が静かに見つめている情景としてよいことになる。

このとき蘇軾は六十五歳。中国の最果て海南島にいたのはそこへ流されたからである。近世のような宋代にも政争があり、そこへ流された人の中にはマラリアに罹って果てた人もいた。一對の掛け軸は鶴と鴉のいる情景が好まれたことを教えるが、じつは、第三句に出る燕が鶴や鴉よりも蘇軾の心をとらえているのである。寒い時期に北から南へ渡る燕は温かくなれば北へ帰って子育てをする。第三・四句は、旧知のいない土地からの北帰行の願いを表現しているのだ。蘇軾は、翌年 1101 年に赦免されたけれども、北へ帰る途上で亡くなった。この詩に愁いが漂うのはやむをえないだろう。しかしわたしは、明朗さを失わなかったあのしなやかな精神を見習いたいと思う。

蛇足を付け加えれば、細君の掛け軸の句は、元は「春入千林所々花、秋沈万水家々月」という禅の言葉だったのを、千宗旦が、上の句の月並みな「花」を「鶯」に変えて揮毫したのだという。鶯がいるところ花がある、という工夫だろう。その「春入千林所々鶯」の軸は、表千家の初釜の床にかけられる慣例になり、流れ来て浦の苦屋に掛かっている。

さて、雨を交えて内海に白波を立てた昨日の南風も去って、  
今日は一陽来復の春であった。

### 五日己亥年元日

昨日から詩句の林に入って遊んでいた蝶が、今日、蘇東坡  
の詩に和して四聯八句の文字列を紡ぎ出した。

老婦仍棲天涯村	海至世界白瀉邨
已慣課植平静日	朝陽出山入東門
春海白浦青鷺立	松葉紅梅緑鳥翻
布衣年々楽人生	苟日々新遊本元

註：第二句（白瀉邨は家山）。第三・四句（課植園に旧雨  
来ること少なく）。第六句（緑鳥は目白、花に鶯とは限らず）。  
第七・八句（質入れできる衣のない下戸の遊楽）。

四声を知らない天涯の野人は、詩のまねごとをしても相変  
わらず平仄を無視し、訓み下して歌うことしかできない。平  
静な生き方はモンテニユの勧める徳目だが、インターネット  
が言う、出山は仏教でゴータマ・ブツダが修行を終えて山  
を下りたこと、西方浄土の入り口は東の門、と。わが庵が内  
海に面し東岸に岬の山並みを望むことを表現したら、思いが  
けず喜ばしい境地を詠う詩に近づいた。

2019年雨水の候、super full moon hidden by clouds